2026年度　入学試験問題

国　語

（第3回・グローバル入試共通）

［注意］

1．試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。

3．解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

4．問題冊子の余白等は自由に使って構いません。

5．試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学付属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（なお本文には省略した部分があります。）

「著作権の問題により、本文を掲載することができません。文字数43字×１０１行の文章」

「著作権の問題により、本文を掲載することができません。文字数43字×101行の文章」

「著作権の問題により、本文を掲載することができません。文字数43字×１０１行の文章」

問1　次の文章はもともと文中にあった段落です。どこに入れるのがふさわしいですか。あてはまる部分の直後の五字を答えなさい。

たとえば、コンサルタントの和仁達也氏は、個人でやっていくコンサルタントに対して、値決めにあたっては自分の報酬をお客さんが何と比較してほしいかを自分で決めるように（客に決めさせるのではなく）とアドバイスしています（和仁、2014）。自分のひと月のコンサルティング料を15万円と設定すると、顧客企業から見て、社員を一人雇うのと比較すれば安くなります。しかし、一般的な月極契約のアドバイザー（税理士など）の報酬の相場から考えると高いと感じられるでしょう。お客さんに安いと思ってもらえれば、喜んで報酬を払ってもらえるというのです。

問2　空らん［A］について次の問いに答えなさい。

(1)　あてはまる四字熟語を漢字で答えなさい。

(2)　この四字熟語の意味を表したことわざとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　木を隠すなら森の中
2　木により て魚を求む
3　木を見て森を見ず
4　木で鼻をくくる

問3　表中の空らん(a)・(b)および文中の空らん(c)に当てはまる数字の組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

	1	2	3	4
(a)	31	69	31	69
(b)	69	31	69	31
(c)	31	31	69	69

問4　空らんBにあてはまる見え方の異なる「二つのケース」として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1
(1)年間の授業料は国立大学が60万円、私立大学が１００万円のままで、国が各学生に一律60万円の奨学金(しょうがくきん)を支給することになった場合。
(2)年間の授業料は国立大学が60万円、私立大学が１００万円のままで、国がその差額の40万円を奨学金として私立大学の学生に支給することになった場合。

2
(1)国が学生1名につき一律60万円の補助金を大学に出して、学生と親御(おやご)さんの年間の授業料の支払(しはら)いは国立大学0万円、私立大学40万円でいいことになった場合。
(2)年間の授業料は国立大学が60万円、私立大学が１００万円のままで、国が各学生に一律60万円の奨学金を支給することになった場合。

3
(1)年間の授業料は国立大学が60万円、私立大学が１００万円のままで、国がその差額の40万円を奨学金として私立大学の学生に支給することになった場合。
(2)年間の授業料は国立大学が60万円、私立大学が１００万円のままで、国が各学生に一律60万円の奨学金を支給することになった場合。

4
(1)年間の授業料は国立大学が60万円、私立大学が１００万円のままで、国が国立大学の学生に一律60万円の奨学金を支給することになった場合。
(2)国が学生1名につき一律60万円の補助金を大学に出して、学生と親御さんの年間の授業料の支払いは国立大学0万円、私立大学40万円でいいことになった場合。

問5　――線①「係留と調整のバイアス」の具体例としてふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　今日はお年玉をもらったので、ふだん三五〇円で買っているパンを二つ買い、弟にもあげようと思った。

2　友人の誕生日のために、ＳＮＳで「いいね」の数が三〇〇を超えている商品ならきっとよい商品だとプレゼントを選んだ。

3　近所のお祭りに出かけるときに、いつももらっているおこづかいよりも一〇〇〇円多く母親からもらって家を出た。

4　「定価八〇〇円の半額四〇〇円」で売られている商品の方が「四〇〇円」で販売されている同じ商品よりお得感がある。

問6　――線②「裁判官や裁判員は求刑という大きなアンカーを受け取ることになる」とありますが、裁判員がアンカーを受け取ることの利点と欠点を六十字以内で説明しなさい。

〔下書き用〕

		10

問8　文中で取り上げられている「フレーミング」「アンカー」について述べたものとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　人物を評価するときに見た目や肩書きといった目立ちやすい特徴に影響される「フレーミング」に対し、「アンカー」とは多くの人が支持する意見や行動に自分も従うべきだと考えてしまうことをいう。

2　様々な調査や分析の段階でかたよったサンプルのみを対象にして意思決定する「フレーミング」に対し、「アンカー」とは過去の経験や蓄積が失われることを惜しむあまり継続を止められないことをいう。

3　同じ情報でも提示方法や焦点のあて方によって受け取り方や意思決定が影響される「フレーミング」に対し、「アンカー」とは最初に提示された情報が基準となり、その後の意思決定が影響を受けることをいう。

4　同じ情報が何度も繰り返されることでその情報が真実であると認識されがちな「フレーミング」に対し、「アンカー」とは新しい情報を取り入れてこれまでの考え方や行動を変えることに抵抗を感じてしまうことをいう。

（問題は次のページに続きます）

2　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、用字・かなづかいは改めました。

ある春の一日、御所で花見の宴が催された。女は、※禁裏に招かれた大臣たちの警護の武士の一団に、酒肴をすすめていた。若い武士たちは烏帽子に狩衣をつけ、毛抜形のそりをうった太刀を傍に置いて、おそらくはじめて見るのだろう禁裏の、それも裏庭からの眺めに、もののめずらしげな目を散らしていた。革くさい武具の匂いのする若者たちであった。

みやびな※公卿たちに慣れた宮中の女どもには、かれらは［A］をひそめさせるようなあらあらしい粗野な男たちに思えた。年若い女どもは、近づくのさえこわがっているのがありありと見てとれたが、①その中で女は、さきに立って酌をしてまわっていた。女の物ごしの落着きに気をくじかれてか、男たちは彼女にだけはひわいな冗談を投げかけることもせず、女もまた、毎年のそのようなかれらからの反応――あるいは反応のなさには、すっかり慣れてしまっていた。

女が一人のまだ若い武士の杯に酒を注いでやったときであった。その杯に、一ひらの桜の花びらが落ちて、浮いた。

「……うつくしい」と、武士はいった。「まるで、あなたの頬が杯に浮いたようだ」

まだどこかに幼な顔ののこった、少年のような武士であった。武士は、そして女をちらりと見て恥ずかしげに睫を伏せ、花びらごと酒をぐいと喉に流しこんだ。

女の胸に、生まれてはじめての熱い痛みがはしったのは、その刹那だった。女は、ごくごくと音をたてて大杯の酒をあおる若い武士の、逞ましい喉の動きを呆然とみつめながら、まるで、あっという間に自分が彼の喉を通り、彼の中に嚥みこまれてしまったようなはげしい惑乱をおぼえた。その一瞬、女はいわば若い武士の中に、すっぽりと包みこまれてしまったのだ。

とたんに身内が熱く火照りはじめ、女は空になった武士の杯を満たしてやるのも忘れて、全身がわななくようにふるえた。少年のような若い武士は、目もとをぽうっと赧く染めて、怒ったような顔で杯の底を見ていた。

そうして、女ははじめての恋に落ちた。恋が身を刺すような一つの痛みであり、その痛みとともに呼吸づく幸せであり、ぼんやりとしたままでの充実にみちびく胸ふさぐおののきであり、なんの理屈もない、ただその人のそばにいたいと願う、ばかげた、しかしとどめようのない火であるのを、女は生まれてはじめて知った。

眠られぬ夜がつづいた。女は、すべてのおつとめに手がつかなかった。武士を思い出すことはいらなかった。杯に目を落して、「うつくしい」と呟くようにいったときのまだ若い武士のすがた、恥じたように目を伏せたその横顔が、まぶたの裏に鮮明に貼りつき、それはひとときも消えることがなかった。

〈中略〉

……女にとり、そのすがたは日ましに鮮明さの度を加えて、ちらりとでも自分の中に住んでい

るその「彼」に目をやるたび、女の全身には炎が燃え、熱い火がゆらめくのだ。女は、放心した表情を見せることが多くなった。

※主上もお言葉をそえられ、気うつならばすこし引きこもって養生せよと仰せられた。女はありがたくそのお言葉を受け、あたえられた一室に引きこもった。

とはいえ、いくら考えても、当時の風習として、いったん※中宮のお側にお仕えした身が、官位もなく、ただの※雑色とたいしてかわりのない一介の武士に嫁ぐことは、許される道理がなかった。また、たとえ御所内の雑色を手なずけ、かれに文使いをたのんだにせよ、あの若い武士のような無位無官の男を、御所にしのびこませることなどは絶対にできない。せっかくのお心づかいで部屋に引きこもったのだったが、なにもせず思いをこらすことは、女の身のうちの炎に油を注ぎ、いよいよ②妄想をつのらせ、肥らせることにしかならなかった。そして、あることを女は思いついた。女は中宮に木彫職人にたのみたいことがあると申し出て、そのご許可を得た。中宮は、気うつ散じに、女が人形とでも遊んでみる気をおこしたのだ、とお考えになられたのだ。

ご想像はあたっていた。たしかに、女は人形をほしいと思ったのだ。が、その人形は、中宮のお考えのような、小さな、いわゆる女子供のもてあそぶそれではなかった。女が木彫職人にたのんだのは、等身大のあの若者のすがたに肖せた木の彫刻であった。

秋に入ろうとする頃、ようやく木彫職人の苦心の作は女の部屋に運びこまれた。

退紅の狩衣、縹色の袴、毛抜形の太刀、靴、それに縁のついていない烏帽子などは、すでに女が手をまわして部屋にそろえていた。女はまず生命のない生木の彫像に、いかにそれらを生あるもののごとく巧みに着せかけるかに専心した。女は、やがて職人から数種のノミを借りうけ、彫像に手を加えはじめた。あの若者のすがたは、目をつぶればたちどころに浮かんでくる。まぶたの裏に焼きついているその「彼」を仔細に追い、女は、けんめいに人形を若者に肖せることに没頭した。

終日、窓の外に吊された※半蔀を引き上げることもない日々がつづいた。わずかな灯油の光をたよりに、女は全身全霊をうちこみ、寝食も忘れて、あの武士を人形によって再現するため身も細るような努力をくりかえした。ときどき、彼女の独りごとに、その人形がうなずいたり、あのときの若者の声で答えたりするような気がすることもあった。その努力はたのしかった。

やっとその人形が完成したのは、ちょうど仲秋の名月の夜であった。人形は、ふつうの人形とはちがって、顔などもあの若い武士と寸分違わず、色つやから毛穴まで丹念になまなましく模写され、耳や鼻の穴、口の中、真白い歯の数からその輝きまで、そっくりそのままの出来であった。女にあの一言を呟いたときのように、目もともぽっと赧くほんのり紅を刷かれ、怒ったような眼眸が伏目がちに高麗縁の畳の目をみつめている。

女は、ほっと呼吸をついて、飽きもせずうっとりとその人形を眺めやった。われしらず、女の口から言葉がほとばしった。

「そなたが恋しい……そなたは、あの一言とともに私をそなたの中に嚥みこみ、私をそなただけのものにしてしまった、私を、そなたの熱いわかわかしい血汐と肉の中に、強引に閉じこめてしまった……私は、そなたが恋しい。③この胸のうちを、この火を、そなたは知らぬといわれるのか……？」

女が、久しぶりに半蔀の板戸をかかげたのは、自らのあまりの息苦しさからであった。が、するとおどろくほど明るい満月の光がなだれ入って、部屋の奥の薄暗い几帳とともに、人形に蒼白い光を浴びせかけた。

月光に照らしだされた烏帽子に狩衣を着けた人形、それは、まごうかたなき本物の若い武士のすがただった。思わず女はにじり寄って、喘ぎながら人形をかき抱いた。顔をあげて、まじまじとその人形の顔をながめた。

そのとき、ふいに女の背に、氷をあてたような悪寒がすべり落ちた。④女は叫び、夢中で人形を突きはなした。人形は、重い生木の音を立てて床に倒れた。

女は顔をひきつらせて、倒れたままびくとも動かない人形、その表情のない顔を、もう一度まじまじとみつめた。女に来ていたのは恐怖だった。生身をそのままにうつし、再現している人形、動かない人形、たしかに恋人とこの人形とは、心のあるのと無いのとの違いだけだったが、それは生きているものと死者との違いだった。女は、ふたたび総毛だつようなうそ寒いおぞましさが、全身を走り抜けるのをおぼえた。

身を硬くしたまま、女は、自分から急激に一つの熱狂が失われてゆくのをかんじた。けんめいに現身の若者に肖せることに熱中し、じじつそれに成功したというのに、いまは見れば見るほどその肖ていることじたいが浅ましく、自分を怖気だたせるのだ。女は、その人形に、いまは贋ものの恋人というより、その恋人への自分の執念のうす汚なさ、不潔な汗と垢にまみれた自分のその妄執のかなしさだけを見ていた。そして、そのおぞましさへの嫌悪といっしょに、女はさしものあの若者への自分の恋までもが、急にあとかたもなく消え、さめ果ててゆくのがわかった。……まるで、夢からさめたように。

もう、その人形をそばに置いておくのもいやであった。女は、几帳の上から⑤やにわにいちばん大きなノミを取ると、人形の頭に突き立て、袿の袖を振って根かぎりの力でそれを打った。人形はたちまち二つに割れ、水の底のような月光のみちた部屋の中で、破壊され、すでに亡骸と化した女の恋そのままのすがたに、生木の白い裂けめをあらわにしてころげた。

⑥女が、ようやく恋を忘れ、そろそろ健康も回復してきたころ、御所には恒例の菊見の季節がきた。

例年と同じように女は甲斐々々しく立ち働き、若い女どもの指図をして、また禁裏へと招かれた大臣たちの警護の武士の一団の酒肴の世話をしていた。大きな酒の甕をもって、革具くさい武

士たちのあいだで杯を満たしてまわりながら、ふと女は、春のあの若い武士が――彼女が身も細るほどの思いでけんめいにその人形をつくった当の武士が――しずかに杯をふくんでいるのを見た。

女は、すっかり彼のことを忘れていたのに気づいた。今日の宴に来ないだろうかとすら考えてはいなかったのだ。彼の発見は、女には意外といえば意外、思いがけぬことだったには違いなかった。

しかし、不思議と女には、なんの動揺もなかった。若い武士は、もはや女の心に小波ひとつ立てず、恐怖も、嫌悪も湧かなかった。ただ、女の胸に訪れてきたのは、春からのあの恋に心をわななかせつづけた日々、人形づくりに没頭してすごした自分の経てきた毎日への、なんともいえない不愉快な重苦しさ、途方もなく長い距離を歩いてしまったあとのような、けだるく漠然とした疲労の、奇妙に空ろなそのひろがりでしかなかった。

女は若い武士に近寄り、酒を注いでやった。こんどは花びらも散らず、武士もなにもいわなかった。案外、彼は翌年一月の、官位を得るための登用試験のことで頭がいっぱいなのかもしれない。⑦やはり［B］で目を落していた。

そこからも、御所の雑色たちが丹精してつくりあげた、見事な一文字造りの大輪の菊の花の群れが眺められた。酒甕をもち歩を移してその波うつような黄白の色彩に目を注ぎながら、女は、今年ほどその菊の花に、春からの一つの季節の推移というものを、⑧重く手ごたえのあるものとして感じたことはなかったような気がした。

（山川　方夫『菊』より）

※禁裏……皇居。宮中。
※公卿……上流貴族。
※主上……天皇。
※中宮……天皇の后。
※雑色……雑務に従事する者。
※半蔀……日光や風雨をさえぎるための、上半分だけ開く戸。

問1　次の文は、もともと文中にあったものです。どこに入れるのがふさわしいですか。あてはまる部分の直後の五字を答えなさい。

中宮が、かつて見せたことのない女のその異常に気づかれないはずはなかった。

問2　空らん［A］にあてはまることばをひらがな二字で答えなさい。

問3　――線①「その中で女は、さきに立って酌をしてまわっていた」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　女は、一人静かに桜を眺めたいと思っており、早く務めを終わらせたかったから。
2　女は、せっかくの宴の場をなごやかなものにしたいと、前向きに考えていたから。
3　女は、他の女たちに負けずに、若い武士たちの関心をひきたいと考えていたから。
4　女は、宮中での経験が豊富であり、粗野な男たちのあつかいにも慣れていたから。

問4　――線②「妄想」とはどのようなことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　中宮が愛(いと)しい若い武士と話せるようにしてくれること。
2　夢のなかで愛しい若い武士が女にほほえみかけてくれること。
3　恋がうまくいって愛しい若い武士の胸に抱かれること。
4　木彫職人が愛しい若い武士の姿の人形を作ってくれること。

問5　――線③「この胸のうち」の内容として**ふさわしくない**ものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　息苦しさ　　2　おぞましさ　　3　熱狂　　4　おののき

問6　――線④「女は叫び、夢中で人形を突きはなした」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　若い武士の生身を人形としてそのままにうつし再現してみたが、その表情までは似せることができず、自身に大きく失望したから。
2　かねてより分かっていたこととはいえ、生身の若い武士と人形とでは心のあるなしの違いは明らかで、強い違和感(いわかん)を抱いたから。
3　この上なく似せた若い武士の人形をかき抱いてみたが、そこに生身の人間のぬくもりはなく、自分を愛してはくれないと感じたから。
4　全身全霊をかけて若い武士の人形を完成させたが、見れば見るほど生身の姿をうつしていることにかえって恐怖を感じたから。

問7　――線⑤「やにわに」の文中における意味として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　突然　　2　おもむろに　　3　ためらいながら　　4　意を決して

問8　――線⑥「女が、ようやく恋を忘れ」とありますが、この女の恋については、はじまりの瞬間と終わりの瞬間が対照的な表現で述べられています。その部分をそれぞれ一文で探し、はじめの五字を答えなさい。

問9　――線⑦「やはり［B］で目を落していた」とありますが、これは女の恋の前後で武士の様子に変化がないことを示しています。空らん［B］にあてはまることばを文中から七字でぬき出しなさい。

問10　――線⑧「重く手ごたえのあるもの」とありますが、それはどのようなものですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　身を刺すような痛みを伴う恋によって眠れぬほど辛く心をふるわせ過ごしてきた日々。
2　過去に経験したことのない恋の始まりと終わりを通して得た自身の人間的成長の実感。
3　若い武士の杯に浮かんだ桜の花びらを思い返すたびに心一面に満たされる恋の充足感。
4　宮中に開いた色鮮やかな美しい菊の花を前に実感する初めて経験した恋の素晴らしさ。

3　次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

わたしを束ねないで　　新川　和江

わたしを束ねないで
※あらせいとうの花のように
白い葱のように
束ねないでください　わたしは稲穂
秋　大地が胸を焦がす
見渡すかぎりの金色の稲穂

わたしを止めないで
標本箱の昆虫のように
高原からきた絵葉書のように
止めないでください　わたしは羽撃き
こやみなく空のひろさをかいさぐっている
目には見えないつばさの音

わたしを注がないで
日常性に薄められた［　　］のように
ぬるい酒のように
注がないでください　わたしは海
夜　とほうもなく満ちてくる
苦い潮　ふちのない水

わたしを名付けないで
娘という名　妻という名
重々しい母という名でしつらえた座に
坐りきりにさせないでください　わたしは風
りんごの木と
泉のありかを知っている風

わたしを区切らないで
，や．いくつかの段落
そしておしまいに「さようなら」があったりする手紙のようには
こまめにけりをつけないでください　わたしは終りのない文章
川と同じに
はてしなく流れていく　拡がっていく　一行の詩

（『新川和江詩集』より）

※あらせいとう……アブラナ科の多年草で高さ五〇～八〇センチメートル。白・桃・赤紫色などの花を房状につける。園芸品種が多い。

問1　この詩の形式として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　口語自由詩　2　口語定型詩　3　文語自由詩　4　文語定型詩

問2　この詩に**使われていない**表現技法を次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　体言止め　2　擬人法　3　直喩　4　倒置法

問3　――線「あらせいとうの花」と対比するものを詩中より三字以内でぬき出して答えなさい。

問4　空らん［　　］にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　絵の具　2　川　3　牛乳　4　時間

問5　この詩の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　「白」や「金色」といった色彩描写には、今までの色味のない人生と決別して今後を華やかにしたいという作者の期待が表現されている。

2　「娘」「妻」「母」という名付けをこばむ表現には、自身の置かれている立場や役割に固定されたくないという作者の思いがこめられている。

3　すべての連に静的な事象と動的な事象を対比して描くことで、社会による束縛から解放され自由になりたいという作者の願いがあらわれている。

4　詩全体に聴覚に訴えたことばをちりばめることによって、詩に臨場感を与え、無意識のうちに情景が連想できるような工夫がされている。

4　次の各問いに答えなさい。

問1　次の各文の――線のカタカナを漢字で書きなさい。（送りがなが必要なものはそれもふくめて書きなさい。）

1　そうじ当番をマジメにこなす。
2　子供が遊んでおもちゃをチラカス。
3　遅(おそ)くまで残って勉強するとはカンシンだ。
4　物事のコンカンをつかんで考えてほしい。
5　事態をすみやかにシュウシュウする。

問2　次のア～オに使われている二字の漢字は部首が共通しています。その部首を持つ漢字を後のA～Fから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい（解答らんⅠ）。また、その漢字の成り立ちを後の1～6から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい（解答らんⅡ）。なお、意味が同じであれば形がちがっていても同じ部首と見なします（例えば 氵(さんずい)と水など）。

例　聖職　→［部首］みみ（耳）
（答え）Ⅰ【漢字】＝聞　Ⅱ【成り立ち】＝とびらの前で声をきく

ア　受け取り
イ　信任
ウ　表裏(ひょうり)
エ　胃腸
オ　判別

Ⅰ【漢字】
A　背
B　介
C　期
D　友
E　分
F　裁

Ⅱ【成り立ち】
1　身体の前後によろいを着けたさま
2　時間の一定の長さ
3　ものを切って二つにする
4　二人がたがいに後ろを向きあって並ぶ
5　服をつくるために布を切る
6　二人が手をつないで助けあう